

連帯意識の関係基盤メカニズム

— 一般化された互酬性に着目して —

九州大学 三隅一人

1 目的

本報告では、連帯意識を促す社会的メカニズムを、関係基盤という概念装置を用いて説明し、社会調査データによってその妥当性を吟味する。とりわけ社会関係資本の議論にそくして、関係基盤の連結が一般化された互酬性規範を強め、異類連帯意識を促すメカニズムに着目する。

2 関係基盤の理論

関係基盤とは、集団よりも高い抽象度において人びとのつながりの基盤となる（シンボルとして<われわれ>関係を間接呈示する）共有属性である。属性の共有は、その関係基盤上に1つのソシオセントリック・ネットワークを定義する。社会関係資本の蓄積はそのネットワークに水路づけられるのであり、その意味で関係基盤は社会関係資本の蓄積場である。個人が複数の関係基盤に関与するとき、その人はそれらの関係基盤（その上で定義されるネットワーク）の連結点となる。いいかえれば、個人が関与する関係基盤の多様性は、その人自身が弱い紐帯となって橋渡し資本蓄積に関わるその蓋然性の高さを示す。こうした関係基盤の連結が、何らかの基盤で誰か（自分）と誰かがつながっているという経験・記憶・想像力（ネットワーク想像力）を培い、これが連帯意識を条件づけると考えるのである。そして、そこにはもう1つの仕掛けとして一般化された互酬性の関わりが考えられる。とくに弱い紐帯を介して手助けを得た経験はネットワーク想像力を刺激し、一般化された互酬性の規範的な関わりを促すであろう。

3 データと方法

上記の仮説を、報告者が2012年に実施したインターネット調査で吟味する。（九州在住25～55歳モニターから無作為抽出。有効回答970 [回収率16.2%]）。主要変数は以下の通りである。一般化された互酬性：「親切は巡り巡っていつかは我が身を助ける」「人は親切にされると他人にも親切になる」「ちょっとした出合いを大切にする」「人と人とはどこでつながるかわからない」という4項目の合計点。関係基盤の多様性：友人の関係基盤数および参加団体数（団体も関係基盤とみなしうる）。同類連帯、異類連帯：「同じ〇〇だから」あるいは「△△のように立場の異なる人たちと」「助け合いましょう」というときの共感度を聞いた一連の項目の主成分得点。

4 結果と議論

一般化された互酬性は一般的信頼や寛容的態度との相関が高いが、一方で、関係基盤の多様性との強い相関や、階層・年齢との無相関のような特徴をもつ。また、「まったくの他人から生涯忘れられないような助力を得た」経験の有無と関連が認められた。けれども、最近の具体的な被助力経験とは無関連であり、これはその助力が弱い紐帯によるものであっても同じであった。記憶に強く刻まれた他人の親切は、「無名の兵士の墓」に類した効果によりネットワーク想像力の飛躍を促すのかもしれない。一般化された互酬性の連帯に対する規定関係を重回帰分析で吟味すると、概して強い規定力を示し、とりわけ異類連帯を強く規定した。

以上は、先の仮説に矛盾する結果ではなく、関係基盤の連結に条件づけられながら一般化された互酬性が連帯を促す固有の働きが示唆される。

※本研究は科研費・基盤研究(C) 23530621「社会関係基盤による連帯とその制度化」の補助を受けています。